

原著<論文>

出生前診断の是非をめぐる保育科学生の意識
—命を守る保育者役割を動機づける「子どもの保健」先天性異常の学習より—

芝田 郁子*1

目次

1. はじめに
2. 研究の方法
3. 結果
 - (1) 出生前検査の賛否について
 - (2) 人工妊娠中絶について
 - (3) 出生前検査に関連する体制について
 - (4) 自分ならどうするか
 - (5) 保育士としてやっていきたいこと
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

保育所保育指針には養護に関する基本的事項が記載されている。その養護理念のなかに「保育における養護とは、子どもの命の保持及び情緒の安定を図るための保育士等が行う援助や関わりであり、保育所における保育は、養護及び教育を一体的に行うことをその特性とするものである」という文言がある。この文言は、保育とは養護及び教育を一体的に行うものであることを謳っているが、前段には保育における養護は命の保持及び情緒の安定のための支援や関わりであると書かれている。それは、保育士の仕事は子どもの命を守るという役割が根底にあるということであり、それを忘れてはならないと考える。

保育科のカリキュラムのなかで子どもの命を守るとの視点に直結している科目は「子どもの保健」であり、「保育内容健康」であると考えられる。つまり、「子どもの保健」「保育内容健康」は、命を守るとは子どもが健康であること、そのための知識、技術を保育者が身につける科目であり、子どもたちにその知識、技術を身につけさせ、いかに子どもの命を守っていくかを考え、実践していく科目である。

*1 名古屋柳城短期大学

「子どもの保健」では子どもの心や体のしくみを理解しながら、子どもに多く、特徴的な疾病や怪我について学び、保育場面での予防や早期発見のスキルを身につけることを目標にしている。同時に、子どもに健康で安全な生活習慣を身につけさせる知識・技術を備えることも目指している。この学びの動機づけには命を意識させることが重要である。子どもは免疫機能が未熟なため感染症が多く、また、月齢が低いほど遺伝や胎内環境に影響を受けた結果による遺伝病や先天異常が多い。子どもの病気を学ぶ入り口として遺伝病や先天性の異常について最初に学習する。親から引き継がれていく命を意識する機会であり、まさに命が誕生するその時から命を守ることの大変さを考える機会となる。

ここ数年、2013年に始まった新出生前診断が話題になっている。新聞・テレビなどマスコミがこの新出生前診断導入後の結果について、その受診数及び確定陽性数と人工妊娠中絶の数を報道している。報道により、この新出生前診断を受けた人の多さ（2013年4月～17年9月で51,139人）や陽性と確定診断された妊婦が人工妊娠中絶を選ぶ件数の多さ（陽性確定700人中654人が人工妊娠中絶を選択）に注目が集まり、命を選択してよいのかの議論が巻き起った。そして、カウンセリングを含めた相談体制等のシステムの整備がないまま実施されることが中絶の増加を招いているのではないかなど、様々な問題が提起された。そのため、この報道を耳にした学生も多いと思われる。新出生前検査をきっかけに命を考えることは今日的であり、自分に引き寄せてイメージしやすく、考えやすいのではないかと考えた。

そして、出生前診断に関連した意識を大学生及び短期大学生に調査し分析している研究は複数ある。東村（2017）は幼児教育及び保育を専攻する短期大学生における出生前診断に対する意識を調べ、背景にある2つの「妊娠—出産」観の存在を導きだした¹⁾。村上ら（2015、2017）は「出生前診断の検査実施」、「受検」、「中絶実施」の意識と知識について、大学生の傾向をみて、さらに同研究の対象者を増やした結果、感情葛藤を伴う問題であるがゆえに、教育の重要性を課題として示した^{2) 3)}。その他に、出生前診断についての意識を助産師学生に問うた我部山ら（2004）⁴⁾、医学部生に問うた加藤ら（2005）⁵⁾、看護学生に問うた廣井ら（2008）⁶⁾、看護系学科生及び理学療法系学科生、法律学科生に問うた木宮ら（2016）⁷⁾、教育系学科生に問うた若松ら（2017）⁸⁾の研究がある。これらの研究では所属学科による差について述べている。

本研究では、教育背景による差を示すものではなく「子どもの保健」における遺伝病・先天異常の授業で取りあげた新出生前検査の是非を通して、保育科学生の命に対する意識

の傾向を知ることを目的とした。その上で命を守る保育者役割の動機づけに出生前診断を取り上げて学習することが有効かについて考えたい。

2. 研究の方法

短期大学保育科に所属する1年生157名(女性154名、男性3名)を対象に後期に組まれている科目である「子どもの保健(予防と疾病)」の2回目の授業終了後に、新出生前検査に賛成か反対かとその理由等を自由に述べる課題を与えた。すでに、1年次の前期には、「子どもの保健(成長と発達)」の授業は終了している。

課題提出にあたっては、2014年6月に放映されたNHKハートネットTVシリーズ選ばれる命の第1回と第2回を視聴している。この番組は前年の2013年4月から実施された新出生前検査を受けて作成されている。第1回は障害ある命を取り巻く現状を考える「問われる出生前検査」、第2回は妊婦の苦悩と向き合う「出産・母親たちの苦悩」である。課題提出時期は平成29年9月12日～19日とした。

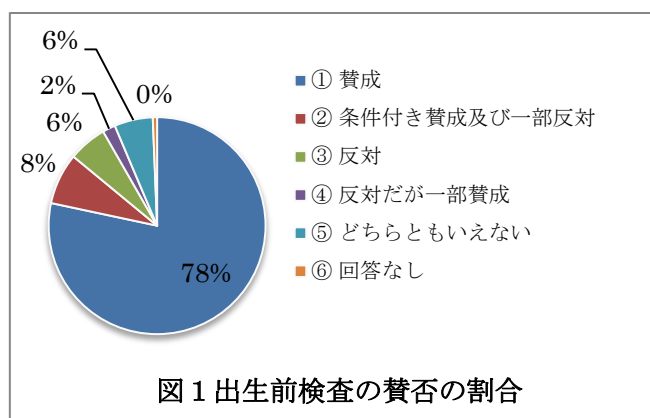
課題は『今日は「子どもの先天異常」について学びました。あなたは出生前検査を行うことに賛成ですか、反対ですか、その理由も書いてください』と出生前検査の是非を問うたものである。まず、賛成か反対かを集計し、自由記述の理由等をカテゴリーに分類して、カテゴリーの内容及びその人数をみた。

3. 結果

(1) 出生前検査の賛否について

表1 出生前検査の賛成・反対人数 (N=157)

No.	項目	人数(男子数)
①	賛成	122(3)
②	条件付き賛成及び一部反対	13
③	反対	9
④	反対だが一部賛成	3
⑤	どちらともいえない	9
⑥	回答なし	1
合計		157



出生前検査の賛否を①賛成、②条件付き賛成及び賛成だが一部反対、③反対、④反対だが、部分的に賛成、⑤どちらともいえない、⑥回答なしの6分類にした。①賛成は122名(うち3名が男子学生)、②条件付き賛成及び賛成だが一部反対は12名、③反対は9名、

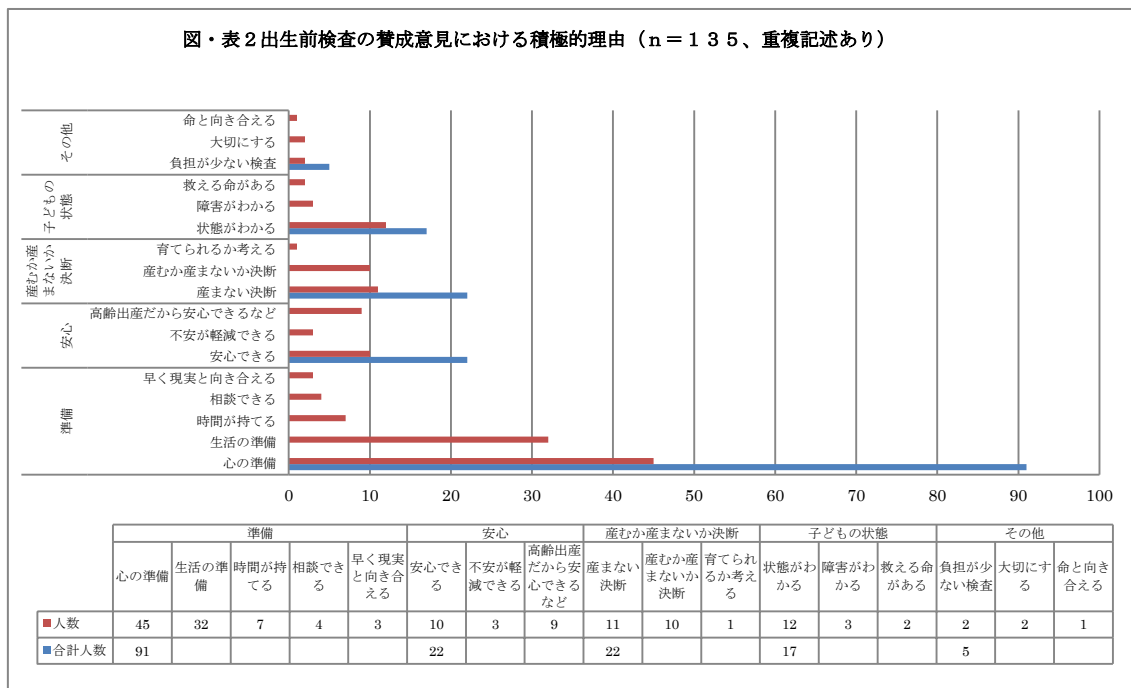
④反対だが、部分的に賛成3名、⑤どちらともいえないは9名、⑥回答なし1名となった。表1、図1のように賛成は78%で、条件つき賛成や部分的に反対なところもあるが賛成という意見も入れると86%が賛成している。反対意見は反対だが一部賛成という意見の学生も入れると8%で1割を満たない結果である。出生前診断を好意的にとらえている学生が多い。男女比が均等でないため性差による比較は行っていない。

1) 出生前検査の賛成理由

出生前検査について賛成と答えた学生についてその理由を分類した。その結果、積極的・肯定的にとらえ理由を述べているものと、検査をしなかった場合と比較し「……よりはよい」と消極的な理由を述べているものに大別できた。

①積極的理由 (n=135、重複記述あり)

「準備の時間が持てる」「安心できる」「生むか生まないかの決断ができる」「子どもの状態がわかる」に分かれた。一つひとつをみていくこととする(図・表2)。



・「準備の時間が持てる」に分類される意見

多いものからあげていく。精神面での準備をあげているものが45名で「心構えができる」「覚悟ができる」「こころの準備ができる」と記述している。生活の準備をあげているものが32名で精神面の準備に比べ内容に広がりがあった。「障害や制度を調べ、知識を得ることができる」、「お金の準備できる」と、「保育園などを探すことができる」など具体的な記述もあれば、「生まれてからのことを考えることができる」、「どう育てていくか考える

ことができる」、「今後どうするか考えることができる」、「環境づくりをすることができる」などの記述があった。また、「考える時間が持てる」をあげたものが7名、「相談する時間が持てる」をあげているものが4名、「早く現実と向き合える」が3名だった。

・「安心できる」に分類される意見

全体の数は22名で、「安心できる」と記しているものが10名、「不安が軽減できる」と記しているものが3名となっている。その他に「高齢出産の人は安心できる」、「晩婚、高齢出産の時代だから」「高齢出産は異常が増え不安だから」のように「高齢出産」の言葉を入れているものが9名あった。

・「産むか産まないかの決断ができる」に分類される意見

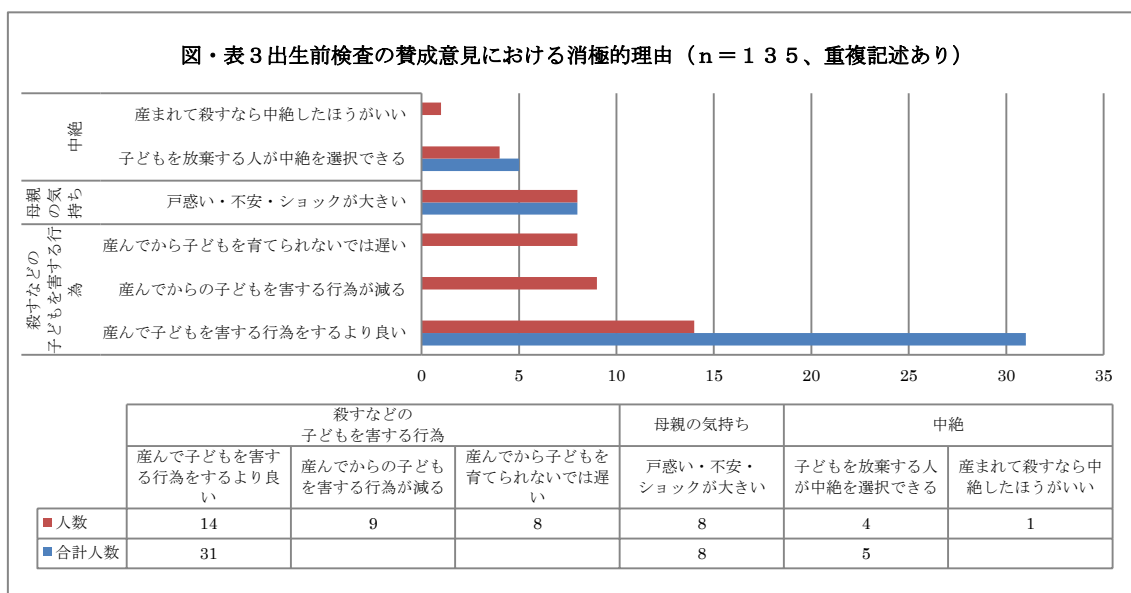
全体の数は22名である。表現に差があるので分けてみると産まないことに視点を置いている「産まない決断ができる」の表現は11名、「産むか産まないか決断できる」と記述しているものは10名、「育てられるか考える」の表現は1名だった。

・「子どもの状態がわかる」に分類される意見

全体の数は17名で、「障害がわかる」は3名、「胎児の状態がわかる」、「子どもの状態が生まれる前に分かる」など「状態がわかる」は12名である。その中の2名が、状態がわかるので、「分娩時万全の態勢が取れ救える命がある」「胎内で治療ができる」と続けて記述している。

・その他として、「わずかな血液で検査ができ、負担が少ない」が2名、「事前に分かれば、大切に作る、愛する」が2名、「命の尊さに向き合える」1名の意見があった。

②消極的理由 (n=135、重複記述あり)



「子どもを害する行為」「母親の気持ち」「中絶」の3つに分かれたので、順にみていく(図・表3)。

・子どもを害する行為

「捨てる」、「傷つける」、「虐待する」、「殺す」のいずれかを使い、「出生前検査を受けて、何らかの対応をしたほうが、生まれてから捨てる、傷つける、虐待する、殺すよりいいから」が14名、「出生前検査を受けて、何らかの対応をした結果、生まれてから子どもを捨てる、傷つける、虐待する、殺すことが減るから」が9名である。さらに、「産んでから育てられないでは遅い」が8名あった。

・母親の気持ち

母親の気持ちをとらえた理由として、「知らずに産んだほうが戸惑い、不安、ショックが大きい」と8名が答えている。

・人工妊娠中絶

人工妊娠中絶に言及する意見が「子どもを放棄する人が中絶を選択できる」4名「生まれてから殺すより中絶したほうがよい」1名である。

2) 出生前検査の反対理由 (n=12、重複記述あり)

反対意見は12名なので、多いものから順に述べていく。「命の選択になる」3名、「中絶が増える」3名、「中絶には抵抗がある」2名、「生まれる前から障害を告げられるのは辛い」「障害があっても生むべき」「障害の理解や環境が整っていない」「検査費用が高い」「自分たちのところにやってきた命は生むべき」「告知後対応してくれる機関がない」「どんな子どもが生まれても自分の子どもだから検査しなくていい」はそれぞれ1名。

3) 決められない理由

「どちらとも決められない」は9名。「障害が軽度かもしれないのに中絶する人がいる」3名、「短時間で決めるのは怖い、辛い」「命の選別はできない」「流産のリスクがあるし、すべての異常を発見できない」「中絶する人が増える」「中絶は赤ちゃんがかわいそう」「障害がわかって産んでも虐待は起こる」「赤ちゃんの状態がわかって、中絶が選択できる場合に自分は悩む」は1名ずつ。

(2) 人工妊娠中絶について (n=112、重複記述あり)

検査実施の賛否の直接的な理由の中で、あるいはそれ以外の部分で人工妊娠中絶についての考えを述べているものがある。しかし、これは一般論としての人工妊娠中絶の是非を論じているわけではなく、出生前検査にまつわる人工妊娠中絶に対しての考え方であること

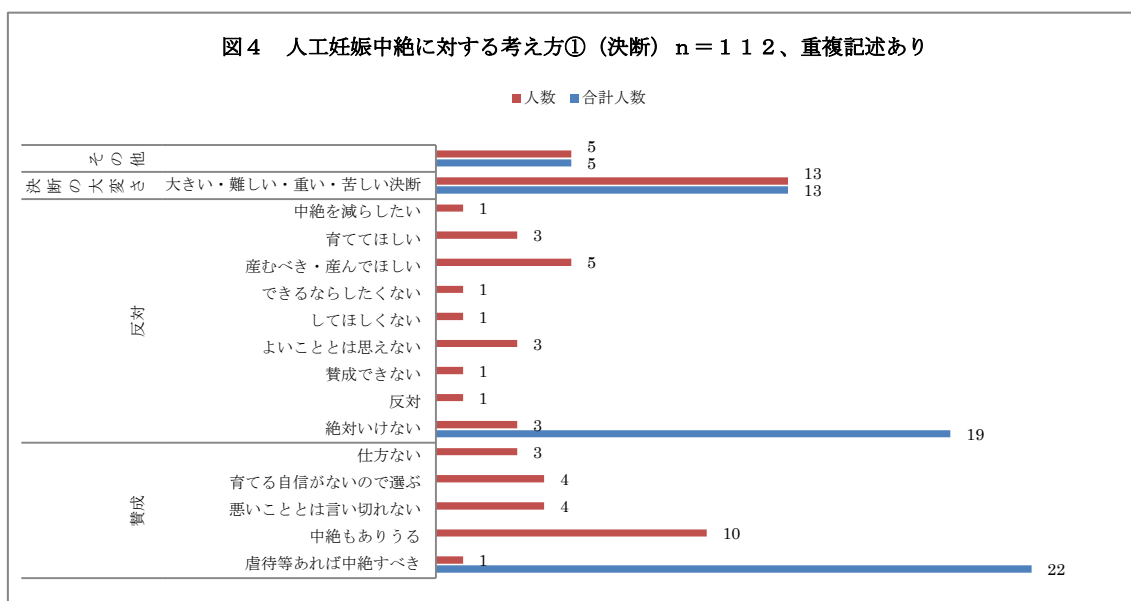
を押さえておく。ここでは、人工妊娠中絶に関して意見を述べているもののとらえ方の傾向を「決断」「意味」「影響」の3点でみていく。

1) 人工妊娠中絶をするという「決断」

はっきり反対に分類される記述しているものは10名、内訳は「絶対いけない」3名（出生前検査に反対している）から「反対」1名「賛成できない」1名「良いこととは思えない」3名「してほしくない」1名「できるならしたくない」1名まで含まれている。その他に、「産むべき・産んでほしい」5名、「育ててほしい」3名、「中絶を減らしたい」1名の記述があり、この9名も分類としては反対と考える。合計19名となる。

賛成に分類される意見は「虐待や放棄するなら中絶すべき」1名「虐待や放棄するなら中絶もありうる」10名「悪いことと言いきれない一つの方法」4名「育てることに不安で自信がないから選ぶ」4名「大変な思いをしての選択だから仕方ない」3名の合計22名で反対より多くなっている。

反対とも賛成とも表明してはいないが、「大きい、難しい、重い、苦しい決断」と決断の大きさを述べている学生は13名であった。その他、「安易に考えない」「他人が責められない」「本人だけの問題ではない」「相談して」「赤ちゃんの声が聴きたい」などの記述があった（図4）。



2) 人工妊娠中絶の「意味」

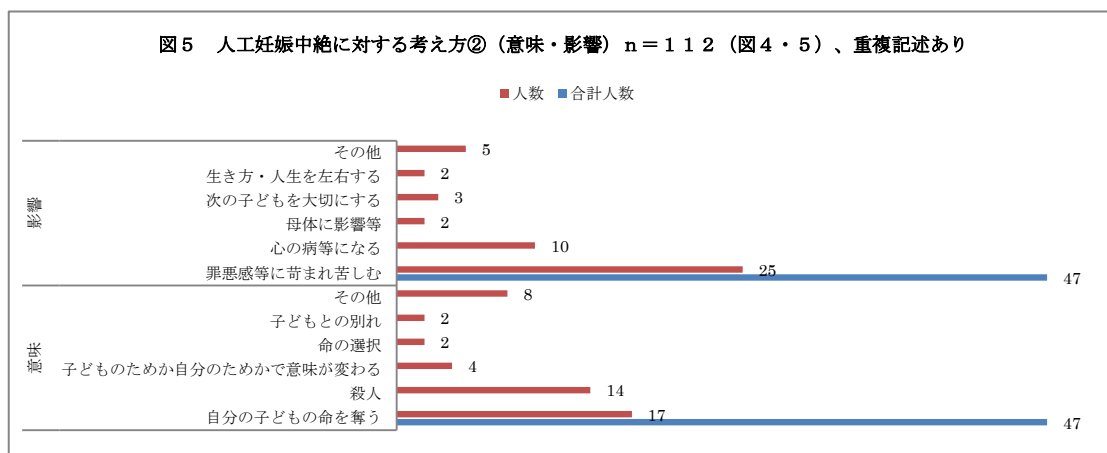
人工妊娠中絶の解釈は命と直結している。多い意見からあげていくと以下のようになった。「自分の子どもの命を奪う」17名、「殺人」14名、この中に「殺人で、人として最低」

と書いている学生が2名（出生前検査に反対意見）、「中絶が子どものためか自分のためかで意味が違ってくる」4名、「命の選択」2名、「子どもとの別れ」2名である。その他に、「悲しい」3名「殺人（中絶）する人の気持ちがわからない」「ひどいこと」「命は同じ」「親の身勝手」「赤ちゃんはお母さんに殺されたとは思わない」などの記述があった（図5）。

3) 人工妊娠中絶が及ぼす「影響」

「影響」は母親である妊産婦への影響という視点である。心と体の両面からの記述があったが、圧倒的に心への悪影響についての記述が多かった。一番多かった意見は「後悔、罪悪感、自己嫌悪に苛まれ、悩み苦しむ」25名、このうち4名は「一生苦しむ」や「長く苦しむ」という言葉を使って、2名は「母親にしかわからない」という言葉を加えている。

次に多かったのは「心の病になる、心の傷、精神的に不安定」との意見は10名、その他、「自分の生き方、人生を左右する」2名、「自殺する」「立ち直れない」「赤ちゃんに申し訳ない」「自分が許せない」「人に中絶したことを話せない」が意見として挙がっていた。3名のみが悪い影響ではない「次の子どもを大切にする」を挙げていた。身体面では2名の学生が「母体に影響する」「妊娠できなくなる」と述べていた（図5）。

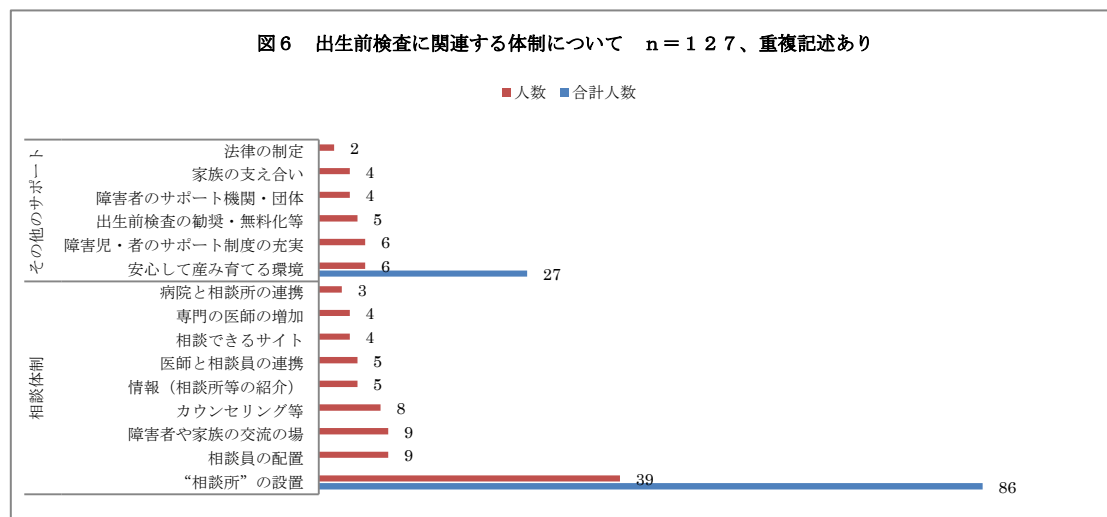


(3) 出生前検査に関連する体制について（n = 127、重複記述あり）

出生前検査実施にあたって、システムづくりについて意見を述べている学生も多かった。以下その内容である。「相談体制」「その他のサポート」に分けた。まずは「相談体制」について「場所」「人」「情報」「連携」の順で意見をあげていく。「相談所」の設置 39名、「カウンセリングや心のケアの実施」8名、「障害者や家族の交流の場」9名、「相談できるサイト」4名、「相談員の配置」9名、「専門の医師の増加」4名、「情報（相談所等の紹介）」5名、「医師と相談員の連携」5名、「病院と相談所の連携」3名だった。

次に「その他のサポート」について多い順から、「安心して産み育てる環境」6名、「障

「障害児・者のサポート制度の充実」6名、「出生前検査の勧奨・無料化等」5名、「障害者のサポート機関・団体」4名、「家族の支え合い」4名、「法律の制定」2名となった。「障害児・者のサポート制度の充実」というのは普通学級へ通学、自立生活のためのヘルパー、障害に合ったジョブ指導、障害者のための良い施設が挙げられていた。「法律の制定」はドイツの妊娠葛藤法のような出生前検査実施に関連したシステムを法制化したものをイメージして言っている（図6）。

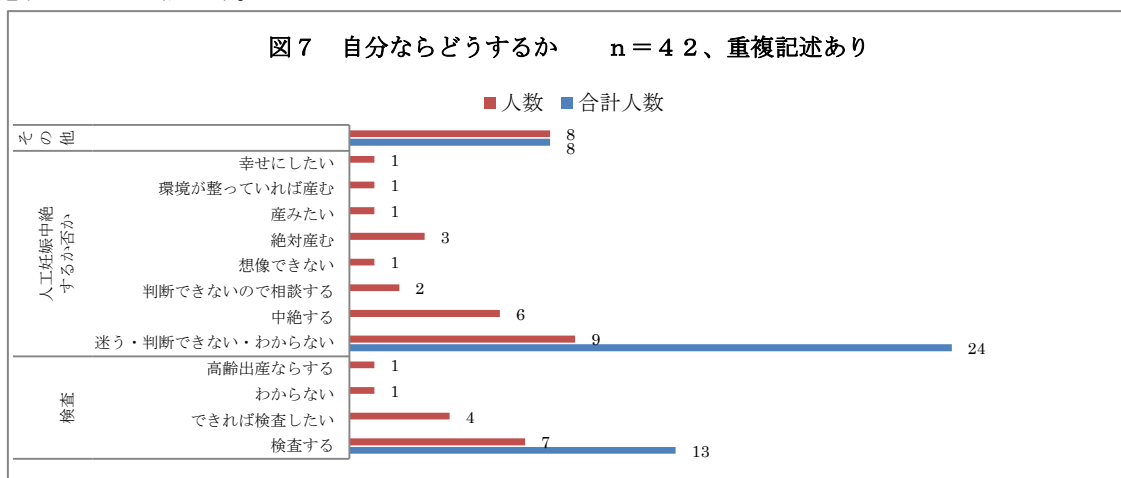


(4) 自分ならどうするか

意見の中に、自分だったらどうするかについて述べているものがあり、それを拾い上げた。内容は検査を受ける否かの視点と先天異常、障害児と診断されたときに人工妊娠中絶をするか否かを中心に記述されていた。検査については「検査をする」7名、「できれば検査したい」4名、「検査するかわからない」1名、「高齢出産なら検査したほうがいい」1名であった。次に人工妊娠中絶をするか否かについては以下の意見がみられた。「中絶する」6名で障害が重度なら、育てる自信がないという理由を挙げている。「迷う・判断できない・どうしていいかわからない」は9名、「判断できないので相談する」2名、「想像できない」1名。出産する立場の意見は、「どんな子どもでも絶対産む」3名、「障害の子どもを産んで幸せそうな家庭を見たので産みたい」1名、「環境が整っていたら産む」1名、「どのような生活をすればいいか勉強して幸せにしたい」1名だった。

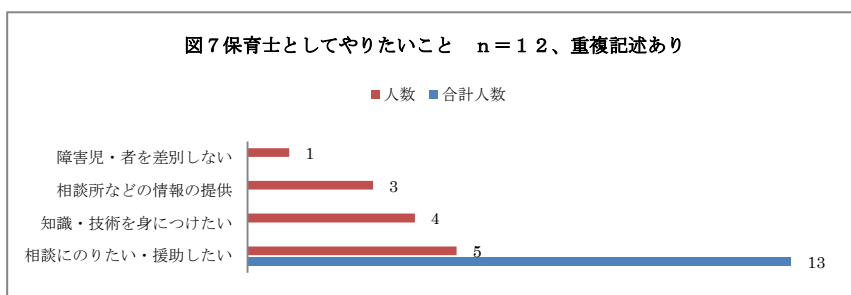
その他には、「自分事にはならず、他人事」「自分の問題として考えていく」「高齢出産にならない前に産みたい」「不自由なく生まれたことに感謝」「身近な障害児者に気遣うようになりたい」「辛さがわからない」などの意見があった。付け加えたいのは障害のある兄弟のいる学生の意見である。1つは「親の大変さを見ているので、決断は難しい」もう一つ

は「兄弟が障害を持っていたから家族の協力を気づけた」であり、正反対とも受け取れる意見である（図7）。



(5) 保育士としてやっていきたいこと

14名の学生が保育士としてやりたいことを記述していた。「相談にのりたい・援助したい」との意見が5名、そのために「知識・技術を身につけたい」4名、「相談所などの情報の提供」3名、「障害児・者を差別しない」1名だった（図8）。



4. 考察

検査を実施することに対する賛成と反対の数からみていく。多くの学生が賛成と記述している。条件付き賛成及び賛成だが一部反対という8%の学生を入れると賛成が86%になる。検査に賛成する学生が圧倒的に多いのは、DVD視聴により知識を得て検査の内容が理解できたことが大いに関係している。わからないことに対しては「どちらともいえない」との回答が多くなるのは当然である。「どちらともいえない」と答えた学生は本研究では9名で6%であった。知識として理解できたことを示している。村上らの研究は前もって対象者に学習をさせてから実施している調査ではなかったため、検査受診の賛否について「どちらともいえない」が一番多く、半数以上であったという結果を示している²⁾。

また、廣井らの研究では、看護学生が「出生前診断を積極的に行っていくか」の問いに

において、76.4%の高い割合で「賛成する」と回答していることについて、看護学生は知識があり、妊娠に対する職業的な意識も手伝って賛成が多かったと分析している⁶⁾。学習によって検査に対する知識があったということばかりでなく、保育科学生は子ども側から物事を考える視点を持っているためか、子どもの状態を知り対応したいという気持ちあり、検査に賛成という意見が多くなったのではないかと考えた。

さらに、理由の全体を眺めて見る。挙げられている理由の内容は前林（2016）「出生前診断についてどう思いますか」の概念図に示されているコメント⁹⁾や東村記述している出生前診断の賛否の理由¹⁾と類似していた。本研究では重複記述ではあるが「覚悟」といった心の準備や子どもの生活の準備を半数以上の91名が挙げて一番多い。次に多かったのは、「生まれてから殺害、遺棄、虐待など子どもが不利益を被るなら産まないほうがいい」と人工妊娠中絶を仕方ないあるいはすべきと考え検査に賛成する学生は31名、「産まない決断ができる」「産むか産まないかの判断をする」ために出生前診断を賛成する意見は22名であった。「障害があると診断を受けた場合にあなたは産みますか」と聞いているわけではないため全員が意見を述べているわけではない。そのため全員の考え方は把握できないが、前述の理由内容全体から人工妊娠中絶より、「子どもの生活の準備」や「子どもの不利益」に目が向いていることは確かである。これらから、母親の立場からの視点より、子ども側からの視点で考える傾向があると思われた。ただ、学生は出生前診断をすることで人工妊娠中絶をする人が増えることへの理解はあるが、出生前診断が命の選択をするためのふりであり、障害児を排除する優生主義の思想が背景にあると記述している学生はいなかった。しかし、検査に反対する学生の中に3名、賛成か反対かどちらともいえない学生の中にも1名「命の選択になる」と記述したものはあった。

親にとっても子どもにとっても良い選択となるよう、生れる前に準備の時間が持てるというものが多く、しかも準備の内容は「覚悟」といった心の準備を始め、様々であったことはすでに述べた。しかし、ここでの大きな問題は子どもの障害がわかった場合に、その結果として産むか産まないかの選択をしなければならないことである。子どもの障害を知った母親は選択を迫られ、母親としての一人では判断できない葛藤に巻き込まれる。どの学生もその状況が容易に想像はできないのだが、思い悩み苦しむ母親の映像を見ることによって、その決断のしんどさに共感している。さらには人工妊娠中絶をした母親の胸の内にある辛さ、苦しみははかり知れないことは一様に感じている。選択する前も選択した後にも苦しみがあることを知り、相談やカウンセリングの必要性の訴える意見が多かった。

数人ではあるが、保育士としても母親の苦しみに対してできることはないかと考え、相談にのりたいと考える学生もいた。さらに、障害児者を受け入れ、暮らしやすく、社会を構成する個々の人々が暖かい社会になるといいと社会のありように言及した学生もいた。

また、「生まれてから障害がわかり子どもを殺したり、虐待をしたり、傷つけたり、捨てたりするなら子どもの障害を早く知り、対応する」から次のことが言えるのではないかと考える学生もいた。学生はもちろん出生前に障害児であることの確定診断ができれば人工妊娠中絶が増えることはわかっている。また、障害のある子どもは殺され、虐待を受けやすいこともわかっている。さらに、出産後に知るのにはショックが大きいという意見もある。だからこそ、早く知ることによって対応ができるのではないかと、そして、障害児に対する殺人や虐待が減るのではないかと期待している。

反対意見は157人中12人と1割にも満たなかったが、検査に賛成できないのは人工妊娠中絶につながるからである。2013年から新出生前診断が行われたが、この検査で障害を持っているとわかると9割の妊婦さんが人工妊娠中絶を希望し実施した現実があったことを受け止めての意見と考える。

これらの意見から、十分に「子どもの保健」において子どもの健康を守る保健活動を動機づける前提としての命の重みに対する各学生の考えを意識化できたと考える。

5. おわりに

DVDにより、新出生前診断を理解し、現在のシステムでは課題も多いことを理解しながらも学生は検査に期待し、賛成するものがほとんどであった。賛成の学生は出生前検査を受けることで様々な準備ができると発想したり、早く知って対応すると障害を持った子どもに対する殺人や虐待が減ると考えることがわかった。そして、相談やカウンセリングなどのシステム体制の充実や障害者の支援の必要性も強く感じている。反対意見の学生は人工妊娠中絶が増えることを問題視している。しかし、他の学生は人工妊娠中絶に対し、理解が表面的で、映像によって中絶した人の苦しみの深さにびっくりする学生が少なからずいた。子どもに対する親の思いの深さをイメージできないのは想像に難くない。また、命を選択するとか優生思想につながると考える学生が少ないこともわかった。

今回、初回授業で子どもの病気の特徴を示し、遺伝病や先天異常に目を向け、出生前検査を話題にし、子どもの命を考えることは、これから結婚・出産をしていく学生にとっては興味関心がある事なので有効な方法と考える。また、出生前検査の賛否と理由を問うたものだったが、DVDを視聴し、知識も増えており、意見も多方面にわたっていた。それ

が、社会制度のこと、自分の家族のこと、保育士としてはどうかなども記述されていた点に現れている。映像を通して、妊婦の苦悩、人工妊娠中絶を行った女性の苦しみやダウン症の子どもがいる家族の幸せそうな様子を実感し、命を守り育てることの大変さ、素晴らしさを感じ、それが、保育士の仕事であるという再認識もできたと思う。

引用文献

- 1) 東村知子(2017)「出生前診断に対する短期大学生の意識—展開されるロジックと潜在する「妊娠—出産」観—」奈良文化女子大学紀要 101—111
- 2) 村上(横内)理恵、吉利宗久(2015)「出生前診断に関する大学生の意識調査」岡山大学教師教育開発センター紀要 第5巻 別冊 148—154
- 3) 村上理恵、吉利宗久、仲矢明孝(2017)「出生前診断に関する大学生の意識および知識に関する調査」岡山大学教師教育開発センター紀要 第7巻 別冊 192—201
- 4) 我部山キヨ子・千菊洋子(2005)「助産学教育における出生前診断の現状と課題—助産師学生の出生前診断に関する意識調査より—」京都大学医学部保健学科紀要：健康科学, 1, 7-13.
- 5) 加藤智美、鈴木康之(2005)「医系学生の先天異常・出生前診断に対する意識調査」医学教育 36(1) 39—43
- 6) 廣井真美・太田俊・甲斐寿美子(2007)「出生前診断に対する看護学生の意識」帝京平成看護短期大学紀要, 18, 13-16.
- 7) 木宮敬信(2016)「出生前診断および先天異常に対する理解と自己決定との関連について」常葉大学教育学部紀要 第36号 237—246
- 8) 若松昭彦、下竹亜里沙(2017)「教育学部生を中心とした大学生の出生前診断に対する意識調査」広島大学大学院研究家紀要第一部 第66号 79—85
- 9) 前橋英貴(2016)「保育学科学生(一年次)の生命倫理に関する意識調査と科目「子どもの保健」における生命倫理教育の必要性の検討」島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol.55 21-29

参考文献

- 板井律子(2013)『いのちを選ぶ社会 出生前診断のいま』 NHK出版
- 雨宮処凛(2014)『14歳からわかる生命倫理』河出書房新社

- 高本真弥 (2017) 「出生前診断の現状と課題」『保健の科学』第 59 巻 第 14 号
- 中島肇 (2017) 「胎児の権利能力の限界と環境因子からの保護」『保健の科学』第 59 巻 第 14 号
- 西山深雪 (2015) 『出生前診断』ちくま新書
- 大野明子 (2013) 『「出生前診断」を迷うあなたへ 子どもを選ばないことを選ぶ』講談社 + α 文庫
- NHK スペシャル取材班 野村優夫 (2017) 『出生前診断、受けますか？納得のいく「決断」のためにできること』講談社
- 香山リカ (2013) 『新出生前診断と「命の選択」』祥伝社新書
- 玉井真理子、渡部麻衣子 (2014) 『出生前診断とわたしたちー「新出生前診断 (N I P T) が問いかけるもの」』生活書院
- 河合蘭 (2015) 『出生前診断 出産ジャーナリストが見つめた現状と未来』朝日新聞出版

要旨

Consciousness of childcare science students over the pros and cons of
prenatal diagnosis:

Children's health to motivate children's role to protect their lives "Learning from
congenital anomalies"

Yuuko SHIBATA

本論文では、「子どもの保健」における遺伝病・先天異常の授業で取りあげた新生前検査の是非を通して、保育科学生の命に対する意識の傾向を知り、命を守る保育者役割の動機づけに出生前診断を学習することが有効かについて考えたものである。

短期大学保育科に所属する1年生157名（女性154名、男性3名）を対象に「子どもの保健（予防と疾病）」の2回の授業の中でNHKハートネットTVシリーズ選ばれる命の第1回と第2回を視聴し、新生前検査に賛成か反対かとその理由等を自由に述べる課題を与えた。

現在のシステムでは課題も多いことを理解しながらも学生は検査に期待し、賛成するものがほとんどであった。賛成の学生は出生前検査を受けることで様々な準備ができると発想し、早く知って対応すると障害を持った子どもに対する殺人や虐待が減ると考えることがわかった。そして、相談やカウンセリングのシステムの充実や障害者支援の必要性も強く感じていた。反対意見では人工妊娠中絶が増えることを問題視していた。

また、初回に、出生前検査をテーマに命を考えることは、学生にとっても結婚・出産は関心事であるため、命を守る保育者役割の動機づけとして、有効な方法と考える。

キーワード ; 新生前検査、人工妊娠中絶、命を守る、子どもの保健、保育者役割